

庭園遺跡の調査と研究経過

建造物研究室・遺跡庭園

旧一乗院庭園遺跡の復元的考察

1、調査の経緯

奈良市壺大路に面して建つ奈良県庁と奈良地方裁判所の敷地が、興福寺旧境内中で最も重要な大乗院(註1)と一乗院兩門跡の住房跡であることは周知の通りである。そのうちでも旧一乗院の屋敷其他の建物を含む敷地が、明治9年奈良地方裁判所に移管され、その後幾棟かの建増しはあつたが、古い建物をひどく

改築することなく、昔のままに利用して来たので、割合よく今日まで残つたのである。そして宸殿、殿上、御玄関など一連の建築群が、創造された時のままの位置に、今日に及んでいることは、近世公家住宅文化の貴重な資料であるだけでなく、寝殿造系建築の研究上最も貴重な意義がある(第1図)。従つて現況のまま保存すべきか、移築して保存すべきかの論議が闘わされて来たのである。遺跡庭園室では、数年前から一乗院関係の古文書や指図の類を蒐集していた。そこで今日まで判明した一乗院庭園の略史をのべよう。

2、旧一乗院庭園の略史

一乗院に関する図を参考にしつつ、地形測量によつて得た資料に基いて宸殿背面に池があつたことを一応推定し得たが、記録の方ではこの池庭のことはあまり問題にされていない。但、古図には宸殿の背面に東南から西北にかけて細長い池水面が斜に描かれ、その末が二つに分岐し、一つは宸殿真北にある書院(註2)から、宸殿の西北隅につづいている渡廊の下をくぐり抜けて、西北に向う水路と、もう一つは、その廊が書院より約58尺のところ直角に曲り、南北に通つているが、その渡廊のほぼ中央部の廊の下方を通つて真西の方向に及んでいる。池の北汀は、実

測図の海拔 8.25m の等高線に添つたものと推定される(第2図)。さてこれらの池庭がいつ頃からのものであるのか判然としないが、その歴史をふりかえつて見ると、それは平安時代にまで溯りそうである。(註3)一乗院文書に

永延二年(987)丁亥九月十一日一乗院御造営也
(中略)南面ニ紫宸殿及内裏御殿仮ニ移即舎屋殿
十二宇禁中自御造営也、此時始水屋川之流水通
也(中略)、寛治七年(1093)三月白河院行幸
先年例一乗院殿入御、此時一乗院殿御池堀匡房
仰金輪池名給也(下略)

とある。記録は伝承に加え後世の粉飾をまぬがれないが、水屋川を通したことや、池庭のあつたことだけは信頼出来ると思う。そこで水屋川から水を引いて来たとなると、それは唐門の東か西かどちらからかということになるし、宸殿の背後に園池があつたとすると、その池の形状や、水辺の勾配なども知りたいので、これらについては最近行つた電気比抵抗法による復元的考察法を加味することとした。

3、電気比抵抗法による池及び遺水の調査

この調査は、旧一乗院庭園にかつて存在したと考えられる池・遺水などの状態を発掘することなしに

第1図 旧一乗院宸殿

地表から探査することを目的として、昭和36年10月30日より11月2日までの3日間に実施したものである。一乗院庭園は、海拔93 m前後にあり、附近の地質は粘土と砂礫の互層より成る洪積層であり、調査地域内で地質学的に特記すべき箇所はみられなかつた。

この測定に使用した器具は京大農学部的好意により借用させてもらつた横河電機製作所製のL 10型大地比抵抗測定器である。測定方法は4極法で、電極間隔0.2 mから0.2 m毎に3 m迄の垂直探査と、電極間隔1 mとする水平探査によつた。前者の測定地点は実測図(第2図)に示し

第2図 一乗院跡実測図
曲線のうち実線は等価比抵抗線(数字 $\Omega \cdot m$)・破線は等高線(数字海拔高)

たIの6箇所であり、後者は調査区域に測線

を設け、各測線上で1 m間隔に測定を行なつた。以下にその結果の概要を記す。

垂直探査の結果は第3図に示す通りである。地下3 mまでは全体的に言つて水平な四層の成層構造をなしている。そして地下80 cm位に帯水層があり、1.5 m以下は水を多く含んだ軟質粘土もしくは粘土交り砂の層と推察される。Ⅲ、Ⅳともに40 cmに低比抵抗帯があり、遺跡と推定し等価比抵抗線図で、Ⅲ附近では約120、Ⅳでは約90 Ωm 以下の地帯に該当すると考えられる。Ⅵは他の場合と異なる層序をなし、池跡と推定し、その深さは約1 mであり等価比抵抗線のうち約90 Ωm 以下の区域がそれに該当すると考えられる。

猶、Iについては1.5~2 mの間が水の多い粘土と推定され、しかも水平探査の結果局所的なものであるから、小さい水溜りがあつたものと思われる。Ⅳの地下1 m前後についても同様である。

以上の結果を実測図(第2図)上に重ねて図示し

第3図 一乗院構内における $\rho-a$ 曲線

ておいたので参考にされた。

なお地質の区分並深度の判定は、参照すべき地質柱状図がなく、全く $\rho - a$ 曲線から解釈したものである。

註

(註1) 奈良ホテル南に池跡があり、それを大乗院跡と呼んでいるが、実は治承の乱で、一乗院の隣にあつた元の大乗院が焼失したので、且て一時大乗院の末寺であつた元元興寺別院の禪定院のあとを別当坊とし、大乗院門跡がそこに移つたまま、遂に元の大乗院に復帰せずに、明治維新を迎えたのである。元の大乗院は現在の奈良県庁の附近にあつた。

(註2) 一乗院指図には書院が2ヶ所にある。真敬入道親王日記では南のを書院又は大書院、北のを北書院と呼んでいる。尊昭親王日記によると、北書院をその用途に従い居間と書いている。池庭をはさんで宸殿の北にあるのは書院又は大書院で、親しい人との対面、接待の場所である。

(註3) この記録は昔のままのものでなく、或る古記録の写しか、抄録なのであろう。

(註4) 拙稿「南都の庭園と春日野の地形と水系」大和文化研究第42号昭和35年10月大和文化研究会発行。

(註5) 電気比抵抗法による埋蔵遺構の調査は既に飛鳥寺跡、法金剛院、東大寺知足院、元興寺極楽坊、平城宮跡の一部などで試み徐々に

成果をあげている。

京都御苑内に於ける寝殿造系庭園遺跡

特に擬花洞について

1、京都御苑一帯の地形測量

平安京内の主要公家邸宅は、一条から三条までの間、東京極と東堀川にはさまれた区域に数多く集中していたことは、平安時代に於ける公家の記録類によつても明かであり、拾介抄其他の地誌によつても知られるのである。

平安時代末期から鎌倉時代に降ると、曾て平安京内に多かつた湧泉が涸渇し、更に室町時代に入ると僅かに平安京の東北隅である一条から二条、京極から烏丸あたりにかけて、稀に泉の湧出を見る程度になつてしまつた。記録上から知られるものは菊亭(南北朝時代の仙洞御所の一つで後に室町殿に吸収される)山科教言朝臣の一条烏丸邸、二条良基公の二条押小路殿、それに足利尊氏居館の南等持寺などであつた。後小松天皇の頃内裏とされ、明徳3年(1332)閏10月5日南朝の後亀山天皇より正式に神器を受けられ、爾来80年にわたり内裏として固定した土御門東洞院殿と、その南側の二条高倉殿も庭園の美景によつて聞え、後に町田家蔵洛中洛外屏風絵にも殿舎と庭園の姿が描かれているほどである。

長い戦国を経て、江戸時代に入つてからも、依然として皇室や公家の邸宅が集中したのはこの附近一帯であつた。また明治以後京都市街がどんどん近代

化して行つたにも拘らず、旧内裏、大宮御所(仙洞御所)、近衛殿、八条殿(桂宮本邸)、九条殿、閑院宮家跡などを含む京都御苑は、草地又は疎林地のままで今日に至つていて、密集した住宅地やビル街などの地域とは違つて、昔ながらの地形や池跡などが残る可能性があつた。

現在京都御苑は厚生省国立公園部がその管理に當つていのであるが、その厚生省国立公園部京都御苑管理事務所の許可を得て、36年11月13日から27日までの約2週間、遺跡庭園室では村岡正君(京大出身庭園研究家)の応援を得て、この一帯の遺構の調査を行つた。既に仙洞御所についてはかねてより文献資料を蒐集していたし、更に昭和31年夏には詳細な実例調査を行うことができたので、その成果は同年秋の美術史学会及び造園学会に於て報告した。また旧内裏京都御所の実測調査は昭和32年夏に行ひ、これまた造園学会への報告を了えた。従つて昨秋の調査は九条殿、閑院宮跡、近衛殿のそれぞれ池庭跡に主力をそそいだのである。また池跡は残つていないが、平安時代以降公家の跡と伝えられる花山院、高倉殿(後の擬花洞)、敬法門院跡などがある。それらについては学報の一部として、別掲のものがあるので省略し、本稿では主として延宝度後西院とその庭園(擬花洞)の地形について述べようと思う。

2、後西院延宝度仙洞御所

擬花洞というのは延宝年間(註4)に於ける後西院仙洞御所の庭園の名称のことである。

旧内裏の南側の敷地は早くから二条殿として聞え町田氏屏風にもその殿舎と庭とが描かれている。此地に最初仙洞御所が設けられたのは寛文3年(1663)のことで、正月26日、靈元天皇に位をゆづつたため幕府は内裏、明正院、後水尾院、東福門院の各御所の造営にひきつづき、12月21日木造始、翌4年8月8日上棟、8月21日移徙されたのがこの後西院仙洞御所であった。そのころの敷地は東西86間余、南北東築地74間余、最長径95間余であり、殿舎の総坪数2907坪余であった。しかしこの御所は10年程で焼失してしまつた。

寛文13年(1673)の火災後の復興は、存外手間取り、延宝3年(1675)3月27日木造始、同7月26日の上棟、同年12月2日上棟と共に移徙が行われてい

第4図 擬花洞築山跡(御苑内)

る。後西院は貞享2年(1685)2月23日崩御され、勸修寺文書によると、この後西院御所は、翌3年5月7日に、その主要殿舎が下賜されていることが知られる。そこで貞享4年(1687)4月、旧内裏の東南の空地に東宮御所を増築し、仙洞御所とするに当つては、後西院御所に残されていた旧殿舎を移建しているの、それ以後宝永4年(1707)にこの地に東宮御所が建てられるまで空地となつていた。

宝永4年(1707)10月造営の慶仁親王(東山天皇皇子)の東宮御所は翌宝永5年3月8日焼け、そのあとは宝永5年7月着工、6年6月21日東山天皇が中御門天皇に讓位され新装成つたこの仙洞御所へ、7月2日に移徙されたのである。

さてこれらの敷地の輪廓は勿論のこと各建物の配置、内裏との関係位置などすべて宮内庁書陵部蔵指図によつて判明するのである。しかしこれにも庭園の部分だけは図示されていない。そこで家蔵擬花洞庭園図を狙上に乗せ、検討を加えて見たいと思う。この図の輪かくは、延宝度の後西院仙洞御所に一致するのである。しかし延宝度の後西院の指図では、東側約3分の1を除き南半分を空白としているのである。その空白の場所は庭園敷地らしく思われる。しかるに家蔵の指図にはこの南半分の東側にも建物がかかれていないのである。ところが前掲の如く延宝度の後西院仙洞御所は、後西院崩御と共に、建物の多くは他所に移建され、一時建物敷地内が完全に空地となつた時期があつた。南北を半々に仕切る塀の北側

にあつて主要建築は勿論のこと、池庭の東側にあつた建物も他所へ移建し、そのあとに池庭を少しく東方へ拡げることがあり得たであろう。

庭園指図はまさしく、このような重要な建物が一つもなく、そして庭園の一部を東の方(建物跡地)に拡張した状態であり、庭園の北部に御茶屋、東北寄の中島に環波亭、南の中島に畳床蔵という2棟の庭園建築と蔵座敷だけを描いたものである。

3、擬花洞庭園の復元的考察

後西院や東山院の仙洞御所の曾ての敷地を圍繞していた築地塀も建築の基礎も、何一つ残っていないので、擬花洞の区域は指図に記入されている寸法と旧内裏(京都御所)や仙洞御所など今日はずきりと残っている門や築地塀からの距離を算出して、図上に復原して見る外に手はない。ところで旧内裏(現在の京都御所は安政造営)との関係から割出して見ると、それは、現在の京都御所の南築地塀から26間75即ち52.70m、旧内裏(京都御所)の西築地塀の線より東側へ95m引き下つて存在したことが判る。そこでこの輪廓内に、家蔵の指図を参考にしつつ比例配分により、同じ縮尺率に於て池庭を書き込んで見ると、現在旧内裡(京都御所)の南築地塀から194mに頂点をもつ東西幅約30m、南北幅約20m、周辺よりの高さ約2.5m(海拔51.31m)の築山は、ちようど家蔵擬花洞古図に書かれている所の池の四つの中島のうち、中央よりやや西寄りにある中島の輪廓とほぼ一致することが判つた。

ここで考えられることは、平安時代の平安京内に於ける寝殿造系庭園にあつては、自然の林丘をそのまま取込んだ庭園の場合は別として、池を掘り上げた土を利用し人工で山を築く場合は、池の周辺に盛土をすることは少く、大ていは中島に土を盛り上げそれを山島と呼んでいたことが作庭記の内容から判明する。また実際に平安時代初期に於ける洛中の庭園では、^(註6)淳和院の池中島に墳状の飯の山があつたし

花山院にも同類のものがあつたらしい。京都近郊の庭園では^(註7)鳥羽殿秋の山があり、室町時代の実例としては蓮如上人の山科南殿跡(光照寺)の中島には海抜高30.5m前後(推定水面より約6m高い)の築山が二つ並び聳えている。現在京都御苑の中に残る近衛殿の中島も築山状であり、桂離宮の場合も、築山は何れも中島上で、殊に賞花亭北方の頂上は海抜28.50m、そして池の水面を抜くこと約7m以上である。即ち築山は池畔に造らず、中島上に築くというのが平安時代以降所謂作庭記流庭園の伝統であるのかも知れない。

今回は地形測量による復原を主眼としたのであるが、将来電気比抵抗法による探査、更に発掘調査によつてこの種寝殿造系庭園の具体的な姿をも明瞭にして見たいものである。

註

第5図 後西院仙洞御所復原図

- (1) 森蘊著「修学院離宮の復原的研究」奈良国立文化財研究所学報第2冊 昭和29年9月 義徳社発行。
- (2) 森蘊・村岡正稿「仙洞御所の庭園について」造園雑誌第23巻第1号 昭和34年8月、日本造園学会発行。

- (3) 奈良国立文化財研究所十周年記念学報第13冊、森蘊著「寝殿造系庭園の立地的考察」昭和37年5月社発行
- (4) 仙洞御所関係の記録や指図については、ほとんどすべてを東京工大平井聖氏の御示教によつた。記して謝意を表する次第である。

- (5) 家蔵図は10数年前先輩針ヶ谷鐘吉氏より贈られたものである。建物は池北の茶屋と中島上の庭園建築の外は1棟も描いていない。

- (6) 拙稿「平安時代前期庭園の研究」建築学会大会論文集第13号 昭和14年4月、日本建築学会発行
- (7) 拙稿「鳥羽殿庭園考」造園雑誌第5巻第2号 昭和13年7月、日本造園学会発行。

- (8) 森蘊著「中世庭園文化史」奈良国立文化財研究所学報第6冊 昭和34年2月、吉川弘文館発行。

(森 蘊・牛川 喜幸)